

まどわされないで

〔聖書〕使徒言行録 10章 9～20節、34～35節

翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。ペトロが、今見た幻はいったい何だろうかと、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、声をかけて、「ペトロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。ペトロがなおも幻について考え込んでいると、“霊”がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」

そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」

〔序〕今日は「聖霊降臨日」

今日は「聖霊降臨日」です。「聖霊」は、ヘブル語では「風」とか「息」とかと同義語です（プネウマ）。神様が人間の心に吹かせる風、命の息、それが「聖霊」です。それは場所や時に縛られることなく、自由に働かれます。しかし、「霊」と言っても幽霊のような得体の知れないものではありません。それは、イエス・キリストが天に帰られた後に降って来たものであり、復活のキリストの御わざを継承する働きをする霊です。ですからその「風」は、自由の風であり、愛の風だと言っても良いのだと思います。

今日の聖書箇所(使徒言行録 10章全体)は、正に「聖霊」のダイナミックな働きを見せられます。イエス・キリストの福音がユダヤを超え、異邦の世界に拡がって行くその過程では、ローマ兵の百人隊長の一人であるコルネリウスという人物と、生粋のユダヤ人である使徒の一人ペトロとの出会いが非常に重要でした。面白いのは、二人がばったりと出会ったというのではなく、それぞれが無関係のようであり、しかし、やがての出会いのためにそれぞれが不思議な体験をしているという描写になっています。

つまり、人間の意志を超えているのです。私たちお互いの出会いというのもそういうものなのかも知れませんね。偶然のように思える出会いも、その背後には神様の綿

密(めんみつ)な御計画がきっとあるのではないのでしょうか。そして、神様との出会いは尚更だと思えます。私たちは自分で神様と出会ったと思ったら、それは高慢なのだと思います。そこにはやはり神様のお働き、**聖霊の導き**があったということですよ。

[1] 主の霊に導かれるふたり

今日の物語は、使徒言行録において、**福音宣教**がエルサレムから始まり世界に拡がるその道程の中で一つの**大きな分岐点**となった出来事だと言われています。10章の順番で言うと初めに導かれたのは**異邦人のコルネリウス**です。カイサリアにいた彼は幻の中、御使いから**ペトロ**をここへ招きなさいとお告げを受けます。コルネリウスはその幻を真剣に受け止め、すぐに三人を遣わします。目的地は40キロ程離れたヤッパの、シモンという者の家です。二日程の旅です。しかし彼らが到着する直前にペトロは奇妙な幻を見ました。それが先ほど朗読して頂いたところです。こうありました。

「人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」ということが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。」

不気味と言っても良いような不思議な幻ですが、ペトロはこの幻を受け止めました。三回も起こったからでしょうか。いや回数の問題よりも「**神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない**」と繰り返される「声」が深く彼の心に留まったのだと思えます。そして思案に暮れていると、そのペトロの所に、コルネリウスからの使者が到着して、是非ともご足労頂きたい、と告げるのです。ペトロはそれに従います。このことによって、その先を読んで頂くと分りますが、コルネリウスも含めてでしょうけれども、その家に集まっていた多くの者たちが主イエスを信じてバプテスマを受けたという出来事に繋がっています。主の福音が、外国人にも広く受け止められ、伝えられていく宣教の歴史の大転換ですが、そのきっかけとなったのは、ペトロが聴いた「**神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない**」との御声だったのです。

[2] 人は変わることが出来る

これは、神様の「福音」の内容がこの時から変わったということなのではないでしょうか。私はそうではないのではないかと思います。おかしな言い方かもしれませんが、「福音が進化した」のではなく、「福音を受け止める人間が進化した」と言えるのではないかと私は思いました。今敢えて「進化」という語を用いましたが、**人は変わることが出来る**、という意味においてです。しかしまた、この「変わる」というのは私たちが何か「超人」のようになるというのではなく、逆にむしろ、「**素朴になる**」というこ

となのかもしれないと思います。それはペトロの言葉の中にも表れています。それが34節です。「ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。」—「神は人を分け隔てなさない」という神様の側の事実が良く分かりました、そのことに目が開かれました、ということだと思います。続けてペトロはこう言いました。「どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。神がイエス・キリストによって——この方こそ、すべての人の主です——平和を告げ知らせて、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、あなたがたはご存じでしょう。」

ペトロが変えられた契機は、先ほどの幻でした。ペトロは一言で言えば、「選民意識」が強かったのだと思います。イスラエル（ユダヤ）こそ、神の民という信仰です。でも神様の本当の思いはそこに留まるものではありませんでした。ユダヤ人以外は汚れているなどという思いを持ちながらの宣教は有り得ないことです。ですから神様は幻のうちに、獣や這うものや鳥などが入った天からの風呂敷を吊り降ろし、「屠って食べなさい」と迫ったのです。ペトロは「清くないもの、汚れたものなど口にしたことはありません」と言いました。大真面目に言ったと思います。自分は純粋な信仰を貫いている者で、偶像礼拝をする異邦人とは違う人間です、と信じていたのでしょう。神様の声は鋭く彼の心に響きました。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」。この出来事が、その後コルネリウスや使いの者たちに、「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました」とペトロに言わしめたのです！

主イエス・キリストによって示された神様は、人を偏り見ない神様です。イエス様はある時おっしゃいました。「丈夫な者には医者はいらない。いるのは病人である。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マタイ 9:12、13 口語訳）と。私たちはすべて神様によって赦されなければならない「罪人」ですから「分け隔て」がないのです。イエス様は全ての人のために十字架について下さいましたから、人間同士は何の差別も、分け隔てもないのです。全ての者が、神様の愛にしっかり抱きとめられています。「神はそのひとり子をお与えになったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の生命を得るためである」（ヨハネ 3:16 口語訳）。「ひとりも」。これが、聖書が一番伝えたいメッセージ、救いの喜びです。

【3】 あなたは「神がきよめたもの」

人間という存在は、否が応でも社会的存在です。環境に左右されます。いやな言葉ですけれども「サヴァイバル」が現存する世の中です。そうなりたくなくても、ある種のずるさを身に着けて年齢を重ねてゆきます。人間は天使ではありません。しかし、主イエス・キリストの霊は、私は、人の様々な限界状況の中でも、自由でしなやかさを与えてくれる霊ではないかと思えます。それは、「受け容れる」霊と言っても良いかもしれないと思えます。「他者と共に生きる」霊です。しかし、信仰深いと思っている人間でもこれはなかなか厳しいことです。それがあのペトロの見た幻だと思うのです。

獣、這うもの、鳥たち…それは清くないもの、汚れたものだと教えられ、それらを食する異邦の民族たちと自分たちは違ふと、ペトロは心のどこかで宗教的優位性に立ち、他者を断罪していたのだと思います。しかし主はおっしゃいましたよね。「**神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない**」。

ペトロの心の深みには「律法」によって義とされる、という傲慢がまだ残っていたのではないのでしょうか。そして、自らを誇る心があった。その彼の心の深みに神様は切りこんだのです。「**他者を裁くあなたは一体何者か!?あなたは獣や這うものや鳥が汚れていると思っている。けれども、あなた自身はどうなのだ。あなたは全く清いのか? そうではないだろう。あなたの罪はまるで獣や這うもののようにではないか。あなたが清くされたのは、わたしが十字架で身代わりになったからだ。悪魔はあなたを高ぶらせる。しかし、その誘惑に惑わされるな。今この世界を覆っているのは、サタンの力や霊ではなく、全ての者を赦し、清める「聖霊」の力なのだ。あなたは私の霊に導かれて、他者と共に生きて行きなさい**」。…そういう出来事だったのではないのでしょうか。このことはペトロの霊の目を本当に開かせたと思います。

【結】 ただ「愛」だけを信じて生きよう

5月の22日に私の娘の家族に初めての子が誕生しました。芽依という名前になりました。産まれたばかりの赤ちゃん、本当に可愛いですね！まだお話など出来ず、ただ命だけがそこに存在しているその姿を見ていると、私は「**赤ちゃんとは、人間の完成形**」ではないかということをおぼされるんです。ただ「**愛**」だけを受けて生きている。そしてその**愛**だけを信じて受け容れて呼吸をしている。赤ちゃんが出来ないことは「**疑うこと**」です。そして「**戦う**」ことです。全くの無力ですが「**愛を信じる**」天才です。

私たちはいつしか「**力**」を身に着けることが生きること、サヴァイバルに勝つことなのだというような生き方になってしまい、**ものすごく疲れていない**のでしょうか？「**命**」そのもので生きるということは出来ないと思ひこまされ、惑わされていないのでしょうか？ 私たちを本当に生かすのは、**愛に満ちた主の霊**です。この主の霊のある所には、共に生きることが出来るよう、違いを当然のこととして受け容れる「**自由**」があります。「**幼子のごとく**」この世の価値に惑わされず、「**わたしは決してあなたを捨てない**」とおっしゃる主イエス様に全く信頼して、共に生きて参りましょう。お祈り致します。

愛する神様、今日は聖霊降臨の記念の礼拝です。今日には見えませんが、主イエス・キリストが霊なるお方として、私たちの中に確かに住んで下さっていることを感謝致します。あなたは人を偏り見ません。こんな罪人である私をも救って下さいました。主よ、あなたの前に幼児のようにならせて下さい。どうぞ私たちを捉え、あなたの愛の中に共に生かして下さいますように。主の御名により祈ります。アーメン。